

令和 2 年 度

小 論 文

10 : 00 ~ 11 : 30

国 文 学 科

(推 薦)

注 意 事 項

1. 開始の合図があるまでこの冊子を開いてはいけません。
2. 合図があつてから受験番号を小論文解答用紙の指定の欄に記入
しなさい。
3. この冊子は 5 ページあります。
4. 印刷の不鮮明な箇所や、汚れの箇所があつた場合は、すみやかに
申し出なさい。
5. 小論文解答用紙は 2 枚入っていますが、提出するのは 1 枚だけ
です。残りの 1 枚は下書き用です。
6. 小論文は縦書きで書きなさい。
7. 冊子と下書きに用いた解答用紙は持ち帰ってください。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

われわれは、物事を説明したり、人を説得したりしようとしたとき、しばしば因果律をよりどころとする。こうだからこういうことが起こるなどと言い、原因や理由とその結果として生起する事態を指し示すことで、他者の理解を得ようとする。ごく自然な営みである。では、たとえば「感動」を語ろうとした場合にはどうだろう。あるいは「美的体験」について述べようとした場合には。これらを言語化しようとする際、われわれはしばしばもどかしさに襲われる。説明のための説明にすぎないのではないか、という疑念に囚^アわれてしまうことがある。感動や美的体験はいつもトウトツ^イにやってくる。こういう理由で心動かされた、と言ってみたとしても、後付けの説明にとどまると感じてしまうのだ。この問題に、古人も多く直面した。兼好もその一人だ。『徒然草』の下巻冒頭、第一三七段の著名な文章を読み解くことを通して、兼好がこの因果律の限界¹をどう突破しようとしたか、見てみることにしよう。

『徒然草』をどう読むか。実はそのこと自体大きな問題である。『徒然草』は随筆とされている。兼好の独特な思想を綴ったエッセイだと見なされている。それで、執筆に至った作者の思想^ウをチュウシュツ^ウするという読み方が、もっぱら行われてきた。だが、作者の思想の表現だという側面のみ^ウにこだわると、つじつまの合わないことが多くなってくる。あちこち矛盾だらけなのである。なにより、読み手に迫ってくるような緊張感もちながら、しかも自在に論点^ウがうつろい、すり替わっていくような、この作品の文章の謎が解けなくなってしまう。そこで、読者をどのように導こうとしたか、読者の中に何を結実させようとしたか、という文章の機能の面を重視しつつ、この作品を文体の側面から考えてみたい。「文体」には、記述する作者を越え、しかもそれを統括する働きが実現しているからである。

もちろん、兼好自身が何を考えていたかを無視するわけではない。読者を惹きつけてやまない文体を生みだしたからには、作者の中に確信とでも呼ぶべきものが育っていたに違いないが、ではその確信とは何か、という形で、広い意味での作者の思想を考^エえてみたい。

花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは。雨に向かひて月を恋ひ、垂れこめて春の行方も知らぬも、なほあはれに、なざけ深し。咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ、見どころ多けれ。歌の事書ことかきにも、「花見にまかれりけるに、はやく散り過ぎにければ」とも、「障さきることありて、まからで」なども書けるは、「花を見て」と言へるに劣れることかは。花の散り、月の傾くを慕ふならひはさることなれど、ことに頑こなる人ぞ、「この枝かの枝散りにけり。今は見どころなし」などは言ふめる。

冒頭の一文「花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは」は、かなり挑発的な物の言い方である。これを、「花は盛りのほかにも、月は隈ならずとも、見どころあるものなり」などという表現と比べてみたい。概念的には大きな径庭はないはずだが、『徒然草』の物言いの方が、ずっと強い印象をもたらす。盛りの花、隈なき月以外の状態がより強調されているから、というだけではないだろう。もしこの後者のような文であつたなら、どうなるだろう。当然だ、という反応が返つてきかねないのではないか。花であれば、咲き始めや散り方のさまも、古来幾たびも愛でられてきた。月であれば、雲間の月や有明の月など強い賞美の対象であつた。だから、もしこれが、明月、盛花以外にも目を向けよう、という論旨であつたなら、ごく一般的な美意識を語っているにすぎないことになる。しかし、この冒頭文は、ややもすれば、盛りの花、隈なき月はそれほど重要ではない、というニュアンスを生みかねない。「のみ……ものかは」という語法には、対象となるもの——この場合で言えば満開の花と遍照の月——を相対化²してしまう語勢があるのである。

「……のみ……ものかは」の、和歌の用例を見てみよう。

名なに立たてる音羽ねの漣なみも音ねにのみ聞きくより袖そでは濡ぬるるものかは

(新後撰集・恋一・七八八・有家)

有名な音羽の滝といえども、音を聞くだけで（噂に聞くだけで）袖が濡れるはずがあるとか、そんなことはあるまい、だのに何で私は、あの人の噂を聞いただけでこんな切ない気持ちで泣き濡れるのだ、という。

兼好自身にも、

九月十三夜、大覚寺二品親王より召されし

三首歌に、寄^{スル}月^ニ待^ツ恋

高砂の尾上^{おのへ}をいづる月だにもさのみは松にさはるものは

（兼好集・一四七）

の用例がある。松で有名な高砂の尾上から出る月だつて、いつもいつも松にさえぎられるわけではない、それと同様に、いつも待っているたびに障害が起こるはずがあるとか、そんなことはあり得ない、きつとあの人が冷淡なのだ、という含意である。これらの例は、意味の上では、「のみ」で限定された以外のことがあるだろう、ということだが、真意は、それ以外の事柄の方が重要だ、ということである。つまり「……のみ……ものは」の文脈は、「……」で示された事柄を、かりそめのもの、あまり重要でないものとして、相対化してしまう。盛花や明月を見る以上に大事なことへと、読み手の意識を誘い込もうとする勢いがあるのである。

実際、その後に挙げられている、「雨に向かひて月を恋ひ」をはじめとする六例は、どれも月や花が見られない例ばかりである。不十分ながら見ることが出来る有様については、その後の、「花の散り、月の傾くを慕ふならひはさることなれど」で、初めて言及される。しかし「さることなれど」というのは、「……ならわかるけれども」といった、積極的とはいえない肯定であつて、落花を惜しむ、月が沈もうとするのを嘆くという、ごく一般的な美的心情に焦点化されることは、回避されている。

ついで、「ことに頑なる人ぞ、「この枝かの枝散りにけり。今は見どころなし」などは言ふめる」という地点にたどり着く。散ってしまった花を「頑^オだにしないような態度を、「頑^ナ（思い込みの強い愚かしさとして退けている。結局このような、通念

的な美意識・固定観念から離れられない排他的な態度こそが否定されていることになるだろう。「月や花の十全の状態である、盛りの花・隈なき月こそが最も美しい」(A)↓「だから、それを賞美すればよい」(B)というような態度への批判である。冒頭の一文は、Bに強い疑問を呈することで、Aさえも疑わせる意志を内在している。AからBへと無自覚に絞られてゆくような通念的思考方法に対して、これを逆流させるような思考法を突き付けて、通念が作り上げられる過程そのものに反省を迫る。「だから」で繋がれるような、原因・理由から結果が導き出される、その関係性を宙吊りにするのである。つまり、通念的思考法自体を懐疑させる力をもつ言葉であり、そういう文体なのである。これを今、固定観念を解体する文体と呼んでおこう。第一三七段は、固定観念の解体を主題において内包し、かつ文体においてもそれを実現している文章なのだと考えられるのである。

(安藤宏・高田祐彦・渡部泰明著『読解講義 日本文学の表現機構』による)

(注) 事書……和歌の前に添える、歌の題や趣旨を書いた文。詞書(ことばがき)。

問一 傍線部ア、オのカタカナを漢字になおし、漢字は読みがなを解答欄に書きなさい。

問二 波線部「名に立てる音羽の滝も音にのみ聞くより袖は濡るるものは」とあるが、ここから動詞をすべて抜き出し、終止形をひらがなで書き、活用の種類と活用形を答えなさい。

[解答例] 向かひ・むかふ・八行四段活用・連用形

問三 傍線部「因果律の限界」とあるが、それはどのようなことか、四〇字前後で説明しなさい。

問四 傍線部2「相対化してしまう語勢」とあるが、それは読者にどのように働きかけるのか、四〇字以内で説明しなさい。

問五 傍線部3「AからBへと無自覚に絞られてゆくような通念的思考方法に対して、これを逆流させるような思考法を突き付けて、通念が作り上げられる過程そのものに反省を迫る」とあるが、そのような態度について、あなたはどうか考えるか、具体例やあなた自身の体験を挙げながら論述しなさい。(六〇〇字以内)